

幼稚園に入園した子どもの「つながり」のはじまり

——他者関係の生成と変容過程——

桃 枝 智 子*

Development of relationships between children soon after entering a kindergarten

MOMOEDA Tomoko

abstract

The process of creation and changes in relationships between children were investigated. Participants were two children who had just entered the first year of a kindergarten. They were selected and studied just after they entered the kindergarten in April, until the end of October. Results indicated that children initiated and changed their relationships with others through trial and error, and that there were differences and commonalities in this process. In the first stage of initiating relationships, children repeated the same action with others. This was followed by a pre-relationship stage, before close relationships were created, during which time they sent one-way messages. There was no stability even after creating a close relationship, but a state of change between unstable and stable ones. Moreover, in the stage of unstable relationships, new relationships were sometimes created and developed with other children.

Keywords : Process of creation and changes in relationships, Kindergarten, New Kindergartners, 3-year-old children

問題

子どもが家庭から離れ幼稚園に入園することは、社会的な集団生活のはじまりとされる。多くの見知らぬ同年齢の他者や保護者とは異なる保育者の存在、家庭生活とは異なる幼稚園の日課など、集団の一員としての生活のはじまりは、子どもにとって当然戸惑いや混乱が多いものであると考える。しかし、子どもは園生活に慣れ安心感を持つようになると、次第に友達と遊びたいという気持ちが高まり、友達とのかかわりが盛んになってゆく。園生活において同年齢の他者と相互に関わることは、社会性を培う上で重要なこととされている。子ども達は幼稚園入園後、どのように同年齢の他者とのつながりを生成し変容させていくのだろうか。

幼稚園に入園した子どものつながりの生成を問題にした研究がいくつか行われ、次のことが、明らかとなっている。安定した友だち関係、仲良し関係、親友関係は、幼稚園入園後1ヶ月半から3ヶ月の間に形成され、親密な親友関係は10月まで持続する(謝, 1999)こと、3歳児は仲間との相互作用を開始する際、仲間の模倣や一緒にいる状態が多いが、次第に相手の活動への参加や暗黙的な方略が増加していく(松井他, 2001)こと、友人関係の形成過程は子どもによって多様である(柴坂・倉持, 1998)ことなどである。

キーワード：つながりの生成と変容、幼稚園、新入園児、3歳児

*平成20年度生 人間発達科学専攻

以上の先行研究では、幼稚園に入園した子どものつながりの生成について量的データの側面から知見を得ることができる。しかし、子どもが同年齢の他者との関係をどのように生成し変容させていくのかといった、より具体的な関係の側面を捉えていくことも必要であると考えられる。

他者とのつながりの生成と変容については、幼稚園年中児の友だちとの関係構築過程についての研究（須永、2005）、保育所に在籍する3歳児を対象にした親密性の生成過程についての研究（高櫻、2007）が示唆を与えてくれる。他者とつながる最初の段階には、特定の他者を志向するのではなく、他者の「あそびそのもの」に魅入られる段階がある（須永、2005）こと、親密性の形成・深化過程には親密性が揺らぐ事態が生じる（高櫻、2007）ことなどが質的な研究によって明らかにされている。しかし、これらの研究は、保育所3歳児、幼稚園年中児を対象としており、入園からの人間関係の歴史が存在する中でのつながりの生成を扱っていると考えられる。

本研究は、幼稚園入園直後の互いに面識のない、いわゆる「個」の状態である子どもを対象とする。そして、彼らが幼稚園入園後、他者とのつながりをどのように生成し変容させていくのか、その過程を質的に捉え検討を行うことを目的とする。

方法

〈観察の方法〉

2007年4月に東京都内の私立幼稚園に入園した3年保育の年少児1クラス（男児10名、女児8名、計18名）において観察を行った。観察期間は、夏休みを除く2007年4月中旬から2007年10月末までの登園から昼食前（短縮保育時は降園時まで）まで、原則として週1度観察した。観察回数は計15日であった。観察対象園は、年少児3クラス（約50名）、年中児2クラス（約50名）、年長児2クラス（約50名）で構成されており、各クラスに1名の担任保育者、また各学年には、担任保育者と共に保育実践に携わる2～3名の保育者が配置されていた。保育時間は、登園開始午前9時から午後2時まで約4～5時間であった（水曜日午前保育を除く）。観察記録については、年少児1クラスに所属する子ども達の行動について、表情や視線および発話など詳細な記録をとるように心がけ、筆記により記録をとった。また、10月末に4月から10月までの子ども達の姿について、担任保育者と話し合いを行い、観察記録の補充を行なった。筆者は、観察当初より観察者としての立場をとっていたため、観察中は幼児から話しかけられることや、保育者としての関わりを求められることは殆どなかった。

〈分析〉

分析においては、観察対象クラスに在籍する園児18名のうち、記録に比較的多く登場していたアイ（女児）とリョウ（男児）の2名に焦点をおいた。全観察記録から2名が登場している事例を抽出した。抽出できた事例は、アイ32事例、リョウ26事例であった。次に、2名の事例の中から、他者とのつながりに関わる事例（アイ24事例、リョウ事例20事例）を抽出し、時系列に並べた。他者とのつながりに関わる事例とは、他者と一緒にいる場合、または、他者に関心を示していると思われる場合を指す。その上で、アイとリョウそれぞれにおけるつながりの生成と変容について分析を行った。アイ、リョウ共に入園前からの友達や顔見知りはいずれもクラス内に存在しなかった。子ども達の名前はすべて仮名である。

結果と考察

I. アイのつながりの生成と変容

アイの他者とのつながりに関する事例（24事例）については、つながりの状態に変容が認められたと筆者が判断した時点で区切りをつけ、幼稚園に入園以降5つの時期に分類した。以下では、各時期におけるアイの他者とのつながりの具体的な事例を挙げ、各時期の他者とのつながりの特徴について考察する。

① 他者と同じ動きをする時期：4月（1事例）

事例1：同調的な動きをするアイとアカネ（4月24日）

アイは、無表情でアカネの後について歩いていく。アカネは隣のクラスに入り、ごっこ遊び用の衣装が置いてある場所へ行く。そして、ピンクのエプロンを箱から取り出すと、無言で腰に巻きつけ始める。アカネの姿を見ていたアイも、箱の中からピンクのエプロンを取り出し、アカネのように腰に巻きつけようとする。しかし、アイはエプロンを身につけることができず格闘しはじめる。アイの姿に気がついた隣のクラスの保育者がアイを手伝う。アカネはアイと保育者の姿を無言で見る。アイがエプロンをつけ終わると、アカネとアイは自分の保育室に戻り、互いに会話することなく無表情で保育室内を歩く。

〈考察〉

この事例では、アイはアカネと同じ行動をとっているものの、互いのやりとりは観られなかった。この時点では、2者間のつながりは生成していないことが推測できる。

しかし、2人が何も会話を交わさず無表情で同じ動きをずっとしていることに注目したい。刑部（2006）は、体の動きの同期はコミュニケーション発達の初期に見られ、体を同じように動かすことによって同じ世界を共有していることを示唆している。また、松井他（2001）は、幼稚園3歳児における仲間との相互作用の開始について、3歳児1期（7月～12月）は、相手と相互作用はないものと一緒にいることや模倣が多く、3歳2期（1月～）になると、そのような状態は減少し相手の活動への参加が増加することを明らかにしている。

このことから考えると、この時点の姿は、つながりが生成される前段階であることが考えられる。

② 特定の他者に一方的なつながりを求め表出する時期：5月（4事例）

事例2：アカネの後を追いかけて保育室を出て行くアイ（5月1日）

アイとアカネは、ごっこ遊び用のスカートをそれぞれ身につける。そして2人は保育室を飛び出すと、アカネが先頭になりスロープを駆け登り2階へと向かう。2階踊り場の移動式飼育小屋に到着すると、アイとアカネはウサギの様子をしばらく眺める。そしてまた直ぐにアカネが先頭になりスロープを走って1階へと下り始める。アイは不安な表情をし「ママー」と叫びながらアカネの後を追いかけてスロープを下る。アイはアカネがどこにいったのか見えない状態になり、やっと1階にたどり着くと「アカネちゃん」と左右を見渡し大きな声で呼びかける。アイはアカネを見つけるや否や、近くにいた年中男児を両手で力いっぱい押し、慌てた様子でアカネのところへと走り出す。

〈考察〉

①の時期でのアイは、アカネと同調的な動きをするだけであった。しかし、この頃より、アカネを追いかけるなど自分からつながりを求め表出するようになった。この事例以外にも、アイがアカネの手を繋ごうとするなど、つながりを求め表出する事例が確認されている。このようにアイはアカネを特定の他者として選好し、一緒にいたい相手、遊ぶ相手として望んでいることがこの事例より窺える。しかし、アカネの方は、アイを特定の他者としてつながりを持つようには見えない。つまり、この時期のアイは、アカネという特定の他者に対し、一方的につなかりを求め表出している状態であると考えられる。

③ 特定の他者とつながり合いを楽しむ時期：6月～6月後半（5事例）

事例3：キャーと叫び抱きしめ合うアカネとアイ（6月16日）

登園したアカネは、保育室に入るなり両手を口に当て「キャー」と叫ぶ。そしてロッカーの前で親と一緒に身支度をしているアイのところへ行く。アイもアカネの姿に気づくと「キャー」と叫ぶ。2人は向かい合って抱きしめ合いながら回りだす。アカネはアイに「来てたのー！！」と嬉しそうに言う。

〈考察〉

これまでは、アイが一方的にアカネに対しつながりを求める姿が観察されていた。しかし、事例3では、

「キヤー」と互いに叫び朝の再会を喜び合っている。この事例以外にも、同じキャラクター柄のタオルを持っていたり同じ色の洋服を着ていたりなど、2人の中で少しでも同じことがあると、2人で「キヤー」と高い声を出して叫び合うことがこの時期頻繁に観察されるようになった。このように、アイのみならずアカネ側からも、アイとのつながりを求めるようになったことが考えられる。

再会という出来事、同じモノという存在は、アイとアカネが互いに相手に対してつながりたい気持ちを確認するための媒介役であることが推測できる。また、2人で「キヤー」と叫び合うという行為は、つながり感をさらに高め合い、特定の他者とのつながりを促進させる役割を持つことが考えられる。

④ 不安定なつながりの時期：6月末～10月中頃（11事例）

〈前期：遊びたい気持ちと憎らしい気持ちの共存期（5事例）〉

事例4：アカネを睨んだ後、作り笑顔をするアイ（6月28日）

屋上でのプール遊びが終了する。アイとアカネは「気持ちよかったね～」「楽しかったね～」と言いながら、水着用バックを片手に持ち、手を繋ぎ歩きはじめる。エミも「楽しかったね」と既に手を繋いでいるアカネとアイの間に入ってくる。3人で手を繋ぎ歩く。保育者の呼びかけで子ども達は上靴に履き替える。アイも保育室に入るために上靴に履き替えると、列の後ろに並ぶ。アカネも上靴を履き替えアイのところにやってくる。アカネは「アイちゃん！」と呼び掛ける。すると、アイはアカネの顔を見て「べー」と舌を出し白目をむいた険しい顔する。隣にいたエミが「べーだって」とアカネに言うと、アカネは確認するように再び「アイちゃん」と呼び掛ける。するとアイは振り返りアカネに向かってわざとらしい作り笑顔をする。

〈考察〉

アイとアカネは濃密なつながりを確立していったものの、次第にアイはアカネに対して「遊びたい気持ち」と「憎らしい気持ち」というアンビバレントな感情を抱くようになった。それには次の理由が考えられる。2者間のつながりの深化によって互いに自分の感情を出すことができるようになったこと、2者間のつながりに新たな他者が入り込むようになったことである。アイに比べアカネは、開放的でこだわりなく自由気ままに行動する。そのため、アイにとっては自分の思惑とは異なる状況や、アカネがアイではない第3者と共に行動する状況が発生する。この事例以外にも、ままごと用具をアカネに横取りされアイが立腹し保育室から出て行く姿や、自分以外の子といるアカネを後ろから睨み続けるという事例が観察されている。入園後、アカネという特定の他者と初めてつながりを持ったアイにとって、そのアカネが自分の思い通りにならなかったり、他の子どもと関わったりすることは苦しい状況だろう。しかし、アイはそれでもアカネとのつながりを求めていることも事例より窺える。一方、何の悪気も無いアカネにとっては、どのようにアイと関わればいいのか困ってしまう出来事であろう。この事例以外にも、ブンと拗ねたアイに対し、アカネが「怒っちゃだよ！」と諭す場面も確認されている。

このように、この時期のアイとアカネの関係は、不安定なつながりの状態に変化したことが推測できる。

〈中期：アカネに対するアイの一時的な歩み寄り（4事例）〉

事例5：キャラクター柄の紙をアカネにあげるアイ（7月16日）

アイは登園するなり「これね、みんなのなんだ。キョウカちゃんのはないの」と保育者に話しながら、登園バックの中からキャラクター柄の紙を取り出す。その後、アカネが登園してくる。アイはアカネを見るなり「キヤー」と叫び、アカネにキャラクター柄の紙を渡す。

〈考察〉

不安定なつながりに変化したアイとアカネであったが、この時期は③の時期同様、2人でつながり合いを喜び合う姿が4事例確認されている。しかしこの時期は、アイがアカネに歩み寄ろうとしている点で③の時期とは異なると思う。この事例では、家から持参したキャラクター柄の紙をアカネに渡しアカネの気を惹こうとしている。また、「キョウカちゃんのはないの」というアイの発言に注目したい。キョウカは、この時期アカネと関わることが多くなった女兒である。アカネを独り占めしたいアイにとってキョウカの存在は不安の種であるのだろう

う。アカネの確保を巡りアイとキョウカが叩き合いを始める姿も観察されている。このことから考えるとこの時期は、アイ自身がアカネとのつながりの維持を求め、試行錯誤している時期であることが推測できる。

〈後期：衝突と決別（2事例）〉

事例6：アイに決別宣言をするアカネ（10月4日）

お集まりの時間になり、遊びを終えた子どもから椅子に座り集合し始める。アカネは既に座っているアイの前になると「キョウカちゃんの隣にすわるから」と言い放ちキョウカの腕をしっかりと掴む。すると、アイはキョウカを自分の方に手で引っ張り寄せせる。アカネとアイはキョウカの腕を引っ張り合う。アイは、引っ張り合いを止めブンと顔を膨らませるとキョウカの隣に座り、キョウカに「一緒に走ろうね」という。

〈考察〉

アイとアカネの間に、とうとう衝突が生じるようになった。これまではアイのアンビバレントな感情にアカネが堪えていたが、この時期に入るとアカネも我慢できなくなり、仕返し行為や決別を意味する発言をアイに言うようになった。この事例以外にも、運動会のリハーサル時に2人の叩き合いが始まり、アカネがアイに対し「アイちゃんなんて大嫌い」と気持ちをぶつける場面が観察されている。また、2人の関係について担任保育者は「触っただけでけんかになってしまうことが多い」と話している。2者間の遊びが成立し継続するためには情動調律が必要であり、特に自己主張が強い3歳の段階では、ぶつかりの際にどのような対応をとるかにとってその後の展開が左右される（高櫻、2007）ことを考えると、不安定なつながりの中にいるアイとアカネは、大きな局面を迎えていることが推測できる。

⑤ 特定の他者へのつながりが緩む時期：10月末（3事例）

事例7：アカネとの距離が離れたアイ（10月23日）

アカネが保育室に入ってくる。マイとチカはダーッとアカネのもとに駆けつける。アイは製作コーナーから「なんか、前髪が上に上がってかわいかったね」とアカネの前髪がピンで留められていることを塗り絵をしながら保育者に伝える。

事例8：ハルオを誘うアイ（10月23日）

アイは、ハルオがいるブロックコーナーに行くと、ウルトラマンのお面をつけたハルオに向かって「プリキュアだ！」と自分がプリキュアに変身していることを宣言する。そしてアイはハルオに「お面、まだ作ってない。ごめん」と言う。突然、謝られたハルオは「う・うん、わかった」と焦った口調で言う。その後、アイとハルオは保育室の角にダンボールで作られた家に入って行く。

〈考察〉

この時期のアイとアカネの関係について担任保育者は「喧嘩になることが続き、アイはアカネから離れて園庭で遊ぶことが多くなった。アカネは、保育者と一緒にいる中でキョウカやナツミ、マミと関わるようになった。」と話している。しかし、事例7からアイにとってアカネとのつながりは完全に切れてしまったのではないことが考えられる。それは、離れた距離からでもアカネの登園を確認していること、また、アカネの髪型に好感を持ったことを保育者に伝えていることである。このことから、アイにとってアカネとのつながりが消滅したのではなく、アカネを独占したいというこだわりが消滅し、アカネと距離を取るようになったことが考えられる。

また、アカネとの距離ができたことによって新たな他者とのつながりも生成され始めていることが事例8によって考えられる。

II. リョウのつながりの生成と変容

リョウの他者とのつながりに関する事例（20事例）については、つながりの状態に変容が認められたと筆者が判断した時点で区切りをつけ、幼稚園に入園以降5つの時期に分類した。以下では、各時期におけるリョウの他

者とのつながりの具体的な事例を挙げ、各時期の他者とのつながりの特徴について考察する。

① 他者と同じ行為をする時期：4月（1事例）

事例9：園舎内のスロープを駆け回るリョウ（4月24日）

リョウとタロウはブロック作った剣を持ち保育室から駆け出ていく。そして1階から2階へと続くスロープを勢いよく上がったたり下ったりする。

〈考察〉

この時期、リョウやタロウに限らず、多くの新入園児が何度も園舎内を走り回る姿が観察された。場所などの物理的環境の認知および興味関心は幼稚園入園後の2週間活発であること（福田ら、1980）から考えると、リョウとタロウにとっては、互いに関わることも園舎内の探索行動が目的であることが考えられる。3歳児では、仲間との関わりを開始する際、一緒にいたり模倣したりする状態から次第に相手の活動へと参加していく（松井他、2001）状態になることを考えると、探索のために走りまわる行動を他者と一緒に行うことは、他者とのつながりを生成するきっかけとなることが推測できる。

② 他者の遊びへのつながりを一方的に表出する時期：5月（7事例）

事例10：仲間入りするが拒否されるリョウ（5月10日）

リョウは、粘土コーナーテーブルで細かく粘土を切っている。リョウは粘土を細かく切りながら、右斜め前のままごとコーナーで遊んでいるタロウ、アカネ、コトハの様子を時折見る。リョウは粘土を切りながら鼻歌を歌い始める。そして、リョウはままごとコーナーの様子をニコニコした表情で楽しそうに眺める。突然、リョウは椅子から立ち上がる。そしてままごとコーナーへ突進すると「おじゃましまーす！」と勢い良く言い、上履きを脱いで入ろうとする。しかし、タロウに「だめ！」と直ぐさま拒否される。リョウは一気に硬い表情になり、粘土コーナーに再び戻り椅子座る。粘土遊びを再開するものの、硬い表情でままごとコーナーの方をチラチラと見る。

〈考察〉

この事例は、リョウがままごとコーナーに駆け込むものの拒否され一気に表情が固まるという姿であり、同様の事例は、7事例中3事例観察されている。また、この事例と逆に、リョウが「ダメ」と他者を拒否する場面も7事例中4事例観察されている。

リョウが他者に仲間入りを拒否されたことから、2つのことが考えられる。1つ目として、リョウは特定の他者と関係を持ちたい為のままごとコーナーへと駆け込んだのではなく、ままごとという遊びそのものに興味を持っていたということである。初めは自分の粘土遊びをしながら、ままごとコーナーの様子を時折見ている程度だったが、次第に自分の粘土遊びよりもままごとコーナーの様子が気になり始め、その様子をニコニコと楽しそうに眺めている。須永（2005）は、他者とつながる最初の段階として遊びそのものを志向する段階を示唆している。

2つ目として、リョウは「だめ！」と拒否された後も、チラチラとままごとコーナーを見ていることである。拒否されたという経験は、他者の存在をより意識させることが考えられる。

一方、リョウが他者に対し「だめ」と拒否する事例では、次のようなことが考えられる。この時期のリョウは、自分の居場所と思われる積み木コーナーに他者が侵入した時や自分の遊びに他者が加わろうとする時に拒否していた。しかし、そのことによって、自分と同じ興味を持っている他者の存在を意識し始めるきっかけとなることが考えられる。

このようにこの時期のリョウは、他者の遊びに惹かれ、他者に対し一方的につなかりを表出していると考えられる。また、自分と同じ興味を持つ他者の存在を意識するようになったと考えられる。

③ 仲間とのつながり合いを楽しむ時期：6月中旬～9月（7事例）

事例11：「おはよう」のあいさつ（6月14日）

ハルオは「ワーワーワー」と言いながらロボットのように手を振り保育室の中に入ってくる。リョウはハルオのところまで駆け寄り「おはよう」と何度も言う。ハルオはリョウの存在に気がつきながらも「ワーワーワー」と言いながら保育室内をロボットのように行進し始める。リョウは追いかけて何度も「おはよう」と言う。リョウは「なんで、おはよう言わないの?」と言う。2人は追いかけてこになる。ハルオはロッカーの前に立ち止まり、上半身を前に突き出すと「日が昇ったよって言ってるんだよっ!」と照れくさそうに叫ぶ。その後、リョウとハルオは「おはよう〜」「ワーワーワー」と掛け合いながらブロックコーナーに行き、ブロックを組み立て始める。コウタも2人の姿を見るとブロックコーナーに向かい「欧米かつ!」とお笑い芸人のセリフを言いながら新聞の剣で2人を突付く。

〈考察〉

5月の末頃より、リョウはハルオやコウタとブロックで剣をつくったり、ままごとをしたりなど、一緒にいる姿が多く観察されるようになった。このことは、リョウは自らハルオに「おはよう」と仲間として声をかけに行ったこと、リョウとハルオのやりとりにコウタもお笑い芸人の物真似をしながら加わったことから推測できる。この事例では、「おはよう」と挨拶するリョウに対し、ハルオが「ワーワーワー」とロボットのように行進し、やっと最後に「日が昇ったよって言っているんだよっ!」と恥ずかしそうに叫ぶ姿に注目したい。「日が昇る」ことは「朝」であることを意味する。ハルオの「ワーワーワー」という発声は、「おはよう」という意味であると理解できること、再会という出来事は、リョウとハルオが仲間として互いにつながりを確認するための媒介役であること、「おはよう」「ワーワーワー」という言葉のやりとりが、互いのつながり感を促進させる役割を持っていることが考えられる。

④ 4人の仲間の閉鎖的なつながりの時期：10月（4事例）

事例12：「俺たちの剣をつくるぞ」（10月4日）

コウタは登園すると、すでに登園していたサトシ、リョウに向かって「俺達の剣をつくるぞ」と言う。リョウ、ハルオ、コウタ、サトシはブロックコーナーでそれぞれブロックを組み立て始める。その4人の周りにはセイタとユウジが立ちすくみ4人の様子を食い入るように見ている。セイタは廃材で作った拳銃を右手で持ち左指を口にくわえ見ている。ユウジも手に持ったブロックを口に入れ、4人がブロックを組み立てていく様子をじっと眺める。タロウが保育室に戻ってくる。タロウも4人の近くに行くと、セイタ、ユウジと共に4人の様子をじっと眺める。リョウ、ハルオ、コウタ、サトルは自分達が見られていることを気がつかないのか何の反応もしない。コウタは「みんなで合体したら長くなるよ。ファイヤーッキング」と組み立てたブロックを持ち上げ叫ぶ。

〈考察〉

これまで仲間としてのつながりが生成されていたリョウ、ハルオ、コウタに、サトシが加わり、4人で遊ぶことがこの時期から多く観察されるようになった。朝、それぞれ登園すると、4人のお決まりの場所と見られるブロックコーナーに向かい、ブロックで銃などを作り始める。この事例でも、コウタが「俺たちの剣をつくるぞ」と登園するなり発した言葉や、「みんなで合体したら長くなるよ」と言った言葉からも、4人の親密なつながりを捉えることができる。

4人が遊んでいる周りには、セイタ、ユウジそしてタロウがじっとその姿を見ている。セイタ、ユウジ、タロウは、4人の中に近づこうとも、または「一緒に遊びたい」と仲間入りしたいことを表明することもせずに、じっと4人のブロック遊びの様子をみている。一方ハルオ、コウタ、サトル、ユウタは3人が自分達を見ていることに何の反応も示さない。ここには「見えざる境界線」（刑部、1998）がしかれていることがわかる。つながりの網の目によって作られた境界線なのである。このように、4人の中では「俺たち」という親密なつながりが形成され、一方、4人以外の子どもから見ればこのつながりは、入ることができない親密で閉鎖的な側面を持ってい

ることが推測できる。

⑤ 4人の仲間のつながりの揺らぎと変容の時期：10月末（1事例）

事例13：いつものメンバーから離れるリョウ（10月30日）

アイとハルオは保育室の角にダンボールで作られた家に入って行く。コウタ、リョウも後に続き家の中に入る。アイはハルオに「寝ましょうよ」と言う。ハルオは「まってよ」と格好よく答える。リョウは「ハルくん、どこでねるの〜？」とハルオに聞く。ハルオは「おとうたん、今日誰？」とごっこ遊びの役割について誰にとでもなく問いかける。すぐさまリョウが「じゃ、ぼくは？」と問いかける。するとコウタが「う〜、俺はおにいちゃんて・・・」とつぶやく。リョウは焦った様子で「ぼくは？ぼくは？」と何度もコウタに聞く。コウタから反応がなかったリョウは一気に硬い表情になり、ハルオ、コウタから離れ、高く積み上げられた積み木コーナーの天辺に上る。天辺で横に寝そべると、ハルオ、コウタ、アイがはしゃぐ様子を眺める。ユウジがリョウのもとに近寄ってくる。そして天辺にいるリョウに「ここはみんなで休むところですよ」ととぼけた口調で言う。リョウは「はいはい、壊さない、壊さない・・・ウンチ」とあきれた口調で言う。ユウジは笑う。リョウは「俺はウルトラマンセブン」と言う。すると、ユウジは目を輝かせ「それって強いんだよね」と言う。リョウは「俺はね、仮面ライダーウンチのお面ある」と言い放つと、自分の所持品が置いてある個人ロッカーに素早く向かう。そして、黒い紙切れを持つと製作コーナーに向かい、椅子に座りハサミで黒紙を切り始める。しばらく経ってケンが保育室に入ってくる。ケンは「そこ、座ってた」とぶっきらぼうに言いリョウをよける。リョウは顔を引きつらせながらも「はいはい」とケンをあしらい他の椅子に座る。ケンは「“はい”は一回でいい」と大人っぽい口調で言う。するとリョウは「“はい”はおしっこでいい」ととぼけて言う。再びリョウは、ユウジとタロウのいる積み木コーナーへ駆けていく。（中略）リョウとタロウがブロックをトランシーバーのようにしながら保育室に駆け込んで入ってくる。リョウは積み木の上に座るとリョウの隣にユウジが座る。

〈考察〉

入園当初、リョウは高く積み上げられた積み木コーナーにすることが頻繁に観察されていた。入園直後のリョウにとっては居場所や縄張りのような場所であった。この事例においては、ごっこ遊びの役割についてコウタ、ハルオから思うような返答がなかったことで表情を硬くし、積み木コーナーの上に寝そべる姿が観察されている。この事例での積み木コーナーは、リョウ自身の気持ちを調整するための場であることが推測できる。その後、リョウのもとにユウジがやってくる。ユウジはいつもリョウ達の中に入ることができず傍らでリョウらの様子を見ていた存在である（事例12）。一方、リョウにとってユウジは関わることはほとんどない相手であった。さらに、その後リョウは、ユウジと一緒にいることが多いタロウ、今まで個人的に関わることもなかったケンともかわりを持つ。リョウが新たな他者とつながりを生成しはじめた原因としては、次のことが考えられる。1つ目として、アイという他者が4人のつながりに入ってきたことによって、これまでの閉鎖的なつながりに揺らぎが生じ始めたことである。2つ目として、新たなつながりへと他の仲間が動き始めたことである。この事例でハルオはアイとのつながりを生成し始めている。サトシは4人から離れ製作コーナーで製作物を作る姿がこの事例の前後に観察されており、新たな興味に向かって動き出していると思われた。つまり、リョウ自身が4人の仲間とのつながりから動かざるを得ない状況が生じていたと考えられる。

このように、4人の閉鎖的なつながりが動き出したことによって、リョウ自身も新たなつながりへと動き始めたと考えられる。

総合的考察

本研究では、幼稚園に入園した子どものつながりの生成と変容過程を描き出すことを目的に、入園直後から10月末まで、幼児2名（アイ、リョウ）の事例を検討した。その結果、アイとリョウのつながりの生成と変容の過程には、共通性と多様性があることが考えられる（Figure 1）。

第1段階として、入園直後のアイとリョウは、他者とのつながりは生成されていないものの、他者との同調的な動きが見られた。3歳児の相互作用の開始は、仲間の模倣や一緒にいる状態が多く、その後相手の活動への参加が増加するという(松井他、2001)。このことを踏まえると、この時期は、つながりの生成の前段階であることが考えられる。

第2段階になると、アイとリョウは他者に対して、一方的につながりをもとめ表出するようになった。他者の何に興味をもつてつながりが表出されるかは、アイとリョウで異なり、つながりの生成過程の多様性が示唆された。アイはアカネという特定の他者に興味を持っていたのに対し、リョウは他者の遊び自体に興味を惹かれていたと思われる。また、リョウの場合、遊びの仲間入りを拒否されたり拒否したりすることは、他者の存在を意識するきっかけとなっていることが考えられる。

第3段階として、アイとリョウは、特定の他者や仲間との相互のつながり合いを楽しむようになった。中でも出来事やモノの存在、他者との言葉のやりとりは、特定の他者とのつながりを促進させる役割を持っていることが考えられた。つながりを持つ特定の他者の人数は、アイは1名、またリョウは複数という相違があった。この相違は、第2段階での相違が影響しているのかもしれない。

第4段階になると、アイとリョウのつながりの状態は次第に変容していった。アイの場合、つながりは不安定となり、アイはつながりを維持するべく試行錯誤するようになった。リョウにおいては、4人の仲間と、第3者が入ることのできないような閉鎖的なつながりを生成していた。このように特定の他者とのつながり合いは、質的には変容を続けていくと考えられる。

第5の段階として、第4段階におけるアイの不安定なつながりが生成し始めたりする状態、リョウの閉鎖的なつながりの状態は、つながりの状態を緩和させたり新たな他者とのつながりを生成し始めたりする第5段階への契機となっていることが示唆された。

親密性の生成・深化過程には、親密性が揺らぐ事態が生じるということが高櫻(2007)の研究によって明らかとされている。本研究でも親密性が揺らぐというべき状態がアイ、リョウ共に確認された。しかし、本研究では、このような状態を経て子どもは、新たな他者とのつながりを生成していくという知見が見出された。高櫻(2007)とは異なる、特定の他者とのつながりの変容過程があることが示唆される。

本研究は、幼稚園に入園した4月から10月末までの観察であり、アイとリョウの他者とのつながりの状態は、時間の経過と共にさらに変容していくものとする。今後、入園から卒園までの長期的な視点で、他者とのつながりの生成と変容を捉えていく必要があると考える。また、本研究はあくまで2名の事例を分析した質的研究で

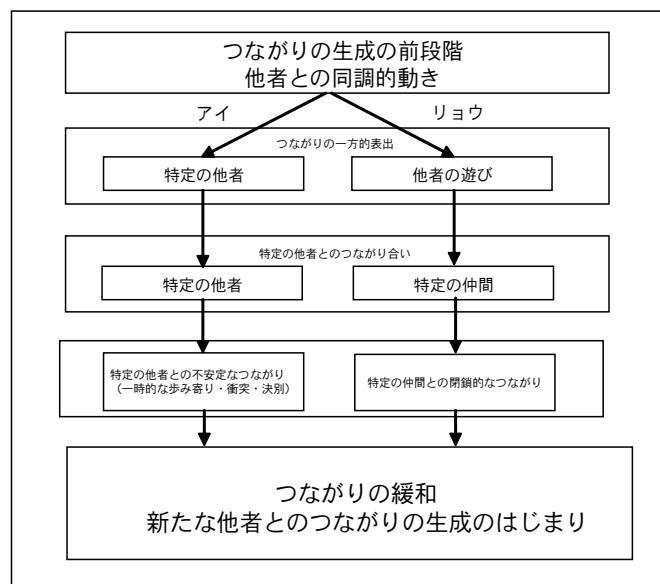


Figure 1 つながりの生成と変容過程

ある。柴坂・倉持（1998）は、多様なつながりの変容過程の存在について指摘していることを考えると、別の子どもにとっては異なる過程が存在することも考えられる。今後、幼稚園に入園した他の子どもを対象にした質的分析を積み重ね、つながりの生成と変容の共通性および多様性について検討していくことが今後の課題であると考える。

文献

- 福田廣・藤原武弘・古川雅文. (1980). 幼児の新環境適応に関する微視発生的研究. *山口大学教育学部研究論叢*, 30, 1-10.
- 刑部育子. (1998). 「ちょっと気になる子ども」の集団への参加過程に関する関係論的分析. *発達心理学研究*, 9, 1-11.
- 刑部育子. (2006). 動くこと見ることの同時性. *デザイン学研究特集号*, 3, 36-39.
- 謝文慧. (1999). 新入幼稚園児の友だち関係の形成. *発達心理学研究*, 10, 199-208.
- 松井愛奈・無藤隆・門山睦. (2001). 幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討. *発達心理学研究*, 12, 195-205.
- 柴坂寿子・倉持清美. (1998). 幼稚園のクラス集団における友人関係. *生活行動研究*, 5, 1-15.
- 須永美紀. (2005). 友だちとの関係構築過程における「あそび志向」段階の可能性：相手と「つながる」ということに注目して. *保育学研* 究, 43, 39-50.
- 高櫻綾子. (2007). 3歳児における親密性の形成過程についての事例的検討. *保育学研究*, 45, 23-33.

付記

本論文は、平成20年に提出した修士論文の一部を再分析し加筆修正したものです。本論文をまとめるにあたり、ご指導下さいました柴坂寿子先生、修士論文のご指導を下さいました刑部育子先生に心より感謝申し上げます。また、研究にご協力頂きました幼稚園のみなさまにも深く感謝申し上げます。ありがとうございました。